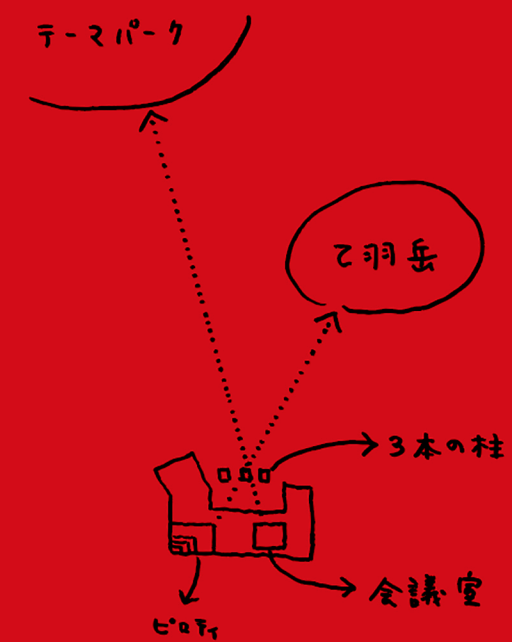


パビリオン構想展

pavilionkousou

パビリオン構想展



pavilionkousou

沖縄国際海洋博覧会が開催されてから、来年で50年が経とうとしている。かつて海洋博で提示された美しい未来の「どこか」。パビリオン建築は無くなっても、その「どこか」は沖縄に残り続ける。

海洋博で提示された青い海・青い空の沖縄のイメージは、その後の沖縄ブームから現在に至るまで楽園的な観光地としてのイメージの元になっている。

開発は、地形的な変更のみならず、風景の見え方を変更する側面もある。海洋博はきっと、本土復帰の祝祭のなかで沖縄の自然の見え方自体が変えられてしまう出来事だったのではないか。

一方、海洋博開催の同年、今帰仁村中央公民館の設計を手掛けた「象設計集団」は、建物を支える柱を乙羽岳の標高と同じ本数で設計し、山をモニュメントとして建築に取り入れた。建物単体ではなく、周囲の自然環境や地域の習慣も含めて、この建物の一部になるように設計したのだ。

リゾートホテルの建設現場や観光客が行き交う通りのそばで、私たちの生活や制作もその中にある。本展覧会では、今もなお変わり続ける風景を、もう一度公民館の中に引き込むことを試みる。

展覧会構成は“蝶”のようなシンメトリー構造を採用した。イマジナリーと現実を出入りする私たちは、再び“パビリオン”の構想を試みる。

パビリオンとは、英語「pavilion」からの外来語。pavilionは、ラテン語の「papilio(蝶)」に由来する。

(参考・語源由来辞典)





 松尾海彦
Umihiko Matsuo

- 1: 《ボラ》
- 2: 《コーラルホワイト・沖縄館》
- 3: 《クワガナー》
- 4: 《コーラルホワイト・アクアポリス》
- 5: 《手・アマイユ》
- 6: 《オキフェダイ》

 泉川のはな
Nohana Izumikawa

《豊稔の先》(2024年)

 遠藤薫
Kaori Endo

- 1: 《通貨と爆弾と結婚指輪》(2024年)
- 2: 動画(約30分)
- 3: 写真

 丹治りえ
Rie Tanji

- 1: 《ユートピア》(2024年)
- 2: 《柱－暫定標高－》(2024年)

 宮城佳久
Yoshihisa Miyagi

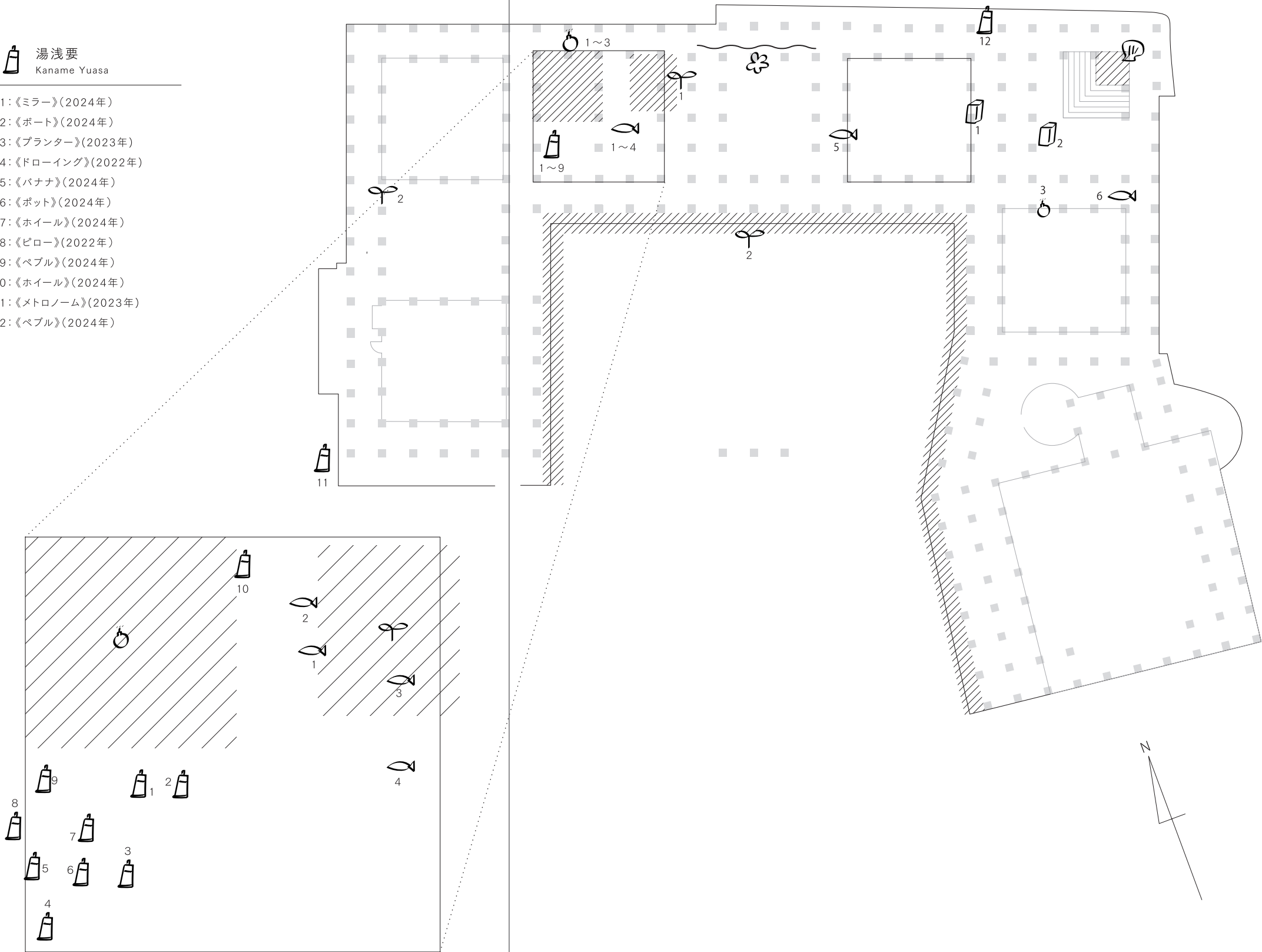
- 1: 《像と匂い》(2024年)
- 2: 軒先の柱もとのポット苗

 貝と言葉のミュージアム
The Museum of Shells and Logos

《詩としてのアシャギ「シャコガイ詩集」》

 湯浅要
Kaname Yuasa

- 1: 《ミラー》(2024年)
- 2: 《ポート》(2024年)
- 3: 《プランター》(2023年)
- 4: 《ドローイング》(2022年)
- 5: 《バナナ》(2024年)
- 6: 《ポット》(2024年)
- 7: 《ホイール》(2024年)
- 8: 《ピロー》(2022年)
- 9: 《ペブル》(2024年)
- 10: 《ホイール》(2024年)
- 11: 《メトロノーム》(2023年)
- 12: 《ペブル》(2024年)



《手・アマイユ》《ボラ》《オキフェダイ》
《クワガナー》(2024年)

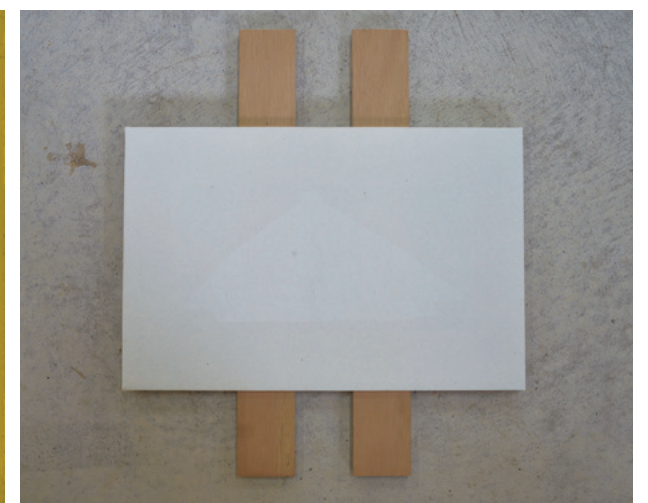
釣具屋の中にかかる魚拓を見るのが好きだった。

どこか知らない海の中にある、個人的な場所を指し示している様で。釣りをして釣れた魚の絵を描いています。私にとって海の上は取り止めのない空間で、場所性を見出す事が困難です。座標的な位置が同じだとしても、時間が変われば違う場所のように表情を変える。海から帰ってきて思い出す魚の形が私にとって一つの場所のように思え、それを魚拓にする事にした。
(麻紙、胡粉、墨)

《コーラルホワイト・沖縄館》
《コーラルホワイト・アクアポリス》
(2024年)

建具や内装の仕事をする中で、日々立面図と平面図を見ながら物を作っている。私は両方の間にある像をイメージする事が苦手で、平面図と立面図を行き来し手を動かす事でしか形を見れない。
分からない形は、まだ用途を伴わない。

(合板、麻紙、ジェッソ)



《豊穣の先》(2024年)

羽地内海沿いの道路を通る途中、嵐山展望台の標識を目にする。周辺の地名の沖縄っぽさとは違う「嵐山」が妙に気になり始めた。なぜ「嵐山」という名前なのか。

琉球王朝時代の仙山から始まり、旧慣温存政策、当時から病といわれていたハンセン病保養地候補、パイナップル農場、ゴルフ場、テーマパーク…と、嵐山という一つの覗き穴から、近代化のうねりの中で目紛しく変化する風景が見えてきた。この地だけでは完結しきれない歴史の変貌は、今を生きる私の眼前に重なり合う風景として現れた。

しかし、それらは事象の記録を時系列に並べたに過ぎない。記録に残らなかった膨大で小さな歴史も、その全てが今見える景色を形成しているにもかかわらず、それらは視界に入らなければ無かったものになる。私という一人称視点が捉えた景色は、記録資料に残された印象的な事象の点在なのかもしれない。それは柱と柱の間から巨大な絵を垣間見るような行為であった。2024年夏のわずか2週間、今帰仁村に滞在しながら、少しずつ大きな布に絵を描いていった。近現代史を跨ぐこのふしぎな場所の全貌はまだ見えていない。(キャンバス、アクリル)



《通貨と爆弾と結婚指輪》(2024年)

① とある沖縄の無人島に580発ほどの不発爆弾が見つかった。それは、戦後直後に沖縄の漁師が爆弾漁(爆破の衝撃で魚を気絶させて捕まえる漁)の火薬として、この小さな無人島に集められていたようだ。

② その無人島にあるクジラの化石は100万年も前のもの。私たちの祖先ではない方の“猿人”が生きていた、お金のない時代。そのかわり、「責務返済」があった。それは、「救済と返礼の儀」だそうだ。ある時はタカラガイという貝が通貨だったこともある。クジラの水死体が富の象徴(恵比寿神)だったこともある。

③ 那覇の国際通りで1969年から古銭商を営むお店がある。当時からコイン通貨を指輪に加工してお土産として売っている。

「沖縄の人は戦後間もない頃、銀の25セントをスプーンで叩いて真ん中をくり抜いて、結婚指輪にしていたよ」と話してくれた。

そういえば、石垣島の鍛冶屋さんもそんな話をしてくれた。

「当時は物資不足で、爆弾片を家の軒下に保管して資材にしていたみたいよ。最近でもそれをおじいおばあが持ってきてね、その爆弾片を打って農道具を作ってくれ、って」

お金とは、価値とは、時間とはなんだろう。その全てが溶けて何者でも無くなるのが、もしかしたら、きっとあるのだろう、と思った。

(第二次世界大戦の爆弾片、飛行機破片、コーラの缶、米軍の葉巻、米軍のネームタグ、沖縄海洋博の記念コイン、1964年東京オリンピック記念コイン、日本の古銭、アメリカの古銭、沖縄のあの世のお金、ベトナムのあの世のお金、古代の貝のお金(タカラガイ))

動画(約30分)

無人島で爆弾片を拾う／無人島でクジラの化石に触る／国際通りで米日通貨を加工している職人のインタビュー(昔の結婚指輪の作り方)

写真

無人島／クジラの化石／不発弾／沖縄の金細工







《ユートピア》(2024年)

地方の盆地で育った私は、山の向こう側には見たこともない理想郷が存在していると信じていた。この乙羽岳の向こう側にも楽園があるらしい。その景色を見るために、乙羽岳の頂上にある展望台に登った。肉眼では捉えることが難しかったが、管理人が貸してくれた双眼鏡を覗き、ピントを合わせると焦点が合った。(2024年7月1日撮影)

《柱－暫定標高－》(2024年)

国土地理院は、令和 7 年度に電子基準点、三角点、水準点等の基準点の標高成果について、衛星測位を基盤とする最新の値に改定することを発表した。これらの基準点は、地球上の位置や海面からの高さを正確に測定したもので、すべての測量の基礎として地図作成や各種測量に使用されている。開発や環境の変化によって土地が変容すると同様に、国土も常に改定が行われているが、生活の中で築き上げた土地へのイメージと実際の地図との間にはしばしばズレが生じる。また、その変容や国土の改定を同時に見比べることは難しく、実感を持つところには一区切りついてしまっていることが多い。1975 年に建てられたこの公民館には、乙羽岳の標高と同じ本数の柱が建てられている。新たに地図が描かれる前に、柱を暫定的に置いた。(アクリルウレタン樹脂塗料、木材、砂)

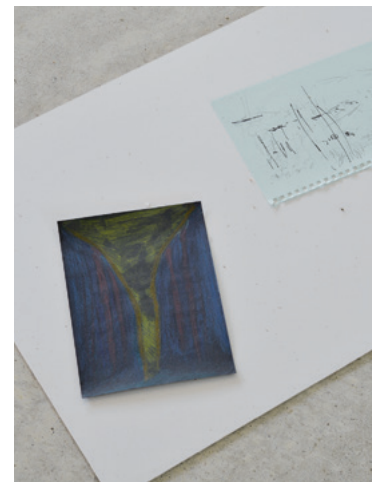


《像と匂い》(2024年)

これらの絵と図と言葉は、始めは畑をつくる際に、そして畑仕事に関わるなかからつくられかき留められてきた。その内容は畑の設計図であったり、畑とその自然環境の理解を深めるために記したメモのようなものだった。環境から受けたものは時間経過を伴って自分のからだの機能を通して像として浮かび、その像を通してまた環境の中へと入ってゆく、そういうやりとりの中で出てきたものである。(紙,水彩紙,色鉛筆,油絵具,パステル,コピー用紙,銅線)

軒先の柱もとのポット苗

畑で自生/栽培している植物/作物をポットへ移植した苗。と、これから畑へ植えつける予定の作物の苗。



《ミラー》(2024年)
 《ポート》(2024年)
 《ブランター》(2023年)
 《ドローイング》(2022年)
 《バナナ》(2024年)
 《ポット》(2024年)
 《ホイール》(2024年)
 《ピロー》(2022年)
 《ペブル》(2024年)
 《ホイール》(2024年)
 《メトロノーム》(2023年)
 《ペブル》(2024年)

認知症だった祖母のことがきっかけで、「見当識」という言葉を出発点に絵を描いている。

「見当識」とは「時間と空間の中に自分を位置付ける能力」のことをいい、その機能に障害が起きると、今がいつなのか、自分がどこにいるのか、目の前の人が誰なのか、正確に認識できないようになる。そのような、定まらない見当識は絵画の中にもあるように思う。描いては消してを繰り返して、絵を描いていくうちに、それぞれの場面が脈略をもたずに繋がり、身に覚えのないイメージが不意に目の前に立ち現れる感覚がある。

そうやって拭き取ったり削いだりしながら絵をつくっていると、「絵にならなかった小さなかたまり」がでてくる。ある時それがなんだか勿体無いもののように感じ、ひろえるものは画面のふちにつけてみるようにした。

それから、チューブで直接絵の具をふちに置いて、キャンパスをパレットの代わりにしながら色をつくるようになった。
 (キャンパス、油彩)



《詩としてのアシャギ「シャコガイ詩集」》(2024年)

シャコガイをみつめる

シャコガイの詩を詠む

それは、渚を言祝ぐこと

そこに、渚のカムイが宿る

それが、詩としてのアシャギ

琉球諸島には古来より、村の中心部に設けられた集会所や神事の場がありました。アシャギと呼ばれるトボス(場)は、社会的な交流の場や儀礼的な活動の場として重要な役割を果たしていました。

ニンゲンと共に暮らしてきた祈りの貝、シャコガイのコトバ ... 特に、名護の安和浜にゆりあげられたシャコガイ ... ニンゲンの営みに翻弄されながらも、静謐に「白く笑う」貝を要にして、36 歌仙に準え、琉歌律(8886)の定型詩「シャコガイ詩集」を編み、「詩としてのアシャギ」というトボス(場)を立ち上げました。

安和浜、アンチ浜、トゥードゥマイ浜にゆりあげられた本部半島礁池に息づくシャコガイ(ヒメジャコ、ヒレジャコ、シラナミ、トガリシラナミ、シャゴウ)のコトバと響きあい、渚と交感していただければと思います。

沖縄島の名護にある安和浜は ... 本部礁池の貝がゆりあがる豊かな渚。辺野古埋め立ての渦中にある渚。50年前に埋め立てられた渚。50年かけて再生した渚。(シャコガイ)



展覧会の背景とはじまり

松尾海彦

今帰仁村中央公民館と海洋博

本展は、1975年に開催された沖縄国際海洋博覧会（以下、海洋博）を念頭に、同年に竣工した今帰仁村中央公民館を、もう一つのパビリオンとして現代に再構想する試みです。パビリオンとは、万博などの「仮設展示館」もしくは「別邸」「離れ」を指し、古くは「蝶」を語源とします。

海洋博は、沖縄の“日本復帰”という国家的転換点を背景に、「祝祭空間」としての沖縄を演出した出来事でした。「青い空、青い海、美しい沖縄」という観光地イメージはこの博覧会を起点として形成され¹、その後の観光開発に大きな影響を及ぼしていきます。

観光化の波が押し寄せる中、沖縄県北部地域では大規模開発が活発化していました。東京から来た建築グループ・象設計集団（以下、「象」）はそうした乱開発に明確に反対し²、恩納村、今帰仁村、名護市の自治体基本構想を通じて、地域の自然や生活を守るための開発のあり方を模索しました³。その中で、海洋博開催と同年に竣工したのが今帰仁村中央公民館です。

この公民館は、地域の自然や歴史に向き合いながら、住民とともに「自力建設」の手法も用いて形づくられました。たとえば、建物を支える276本の柱は、目の前にそびえる乙羽岳の標高（276メートル）と呼応しています。

シーサーは建物に対して反転し逆を向いており、床や天井には貝殻が埋め込まれ、かつて屋根には植物が植えられていました⁴。一見すると効率性から逸脱した設計に見えますが、むしろ土地に宿る記憶を建築に内包しようとする強い意思の表れでした。公民館は沖縄という土地に対する第三者からの一つのアプローチとして残り、老朽化しながら今も使われ続けています。

本展は、そのような建築と呼応することを目指しました。

展示動線の核となるのは、会場である今帰仁村中央公民館の設計者「象」が用いた「環境構造線」の概念です⁵。後の名護市都市計画において明確に打ち出されることになるこの概念は、都市や建築と周辺の残すべき景観を

真っ直ぐな軸線で結び、景観をモニュメント化する手法です。軸線は建物内部にまで引き入れられ、区画や形態に影響を与えます。

「象」の「環境構造線」を理解する上で、建築家の丹下健三が広島平和記念公園で提示した軸線の構想を参照したいと思います。原爆ドームは、当初公園の外にありながら、公園内の構築物と一直線に結びつけられました⁶。これにより、後年の保存判断や都市計画の中で、原爆ドームは軸線上の象徴的存在として位置づけられていった経緯があります。

「環境構造線」とは、海洋博を契機に乱開発が懸念された当時の沖縄県北部地域において、未来に残すべき景観を広島平和記念公園の原爆ドームのように象徴的に結びつける行為だったのではないのでしょうか。しかし、「象」が地域の普遍的価値としてモニュメント化した景観は、現在では姿を変えつつあります。

50年という歲月の中で、「象」が設定した空間にズレが生じたのであれば、現状を反映する「環境構造線」をもう一度引き直し、建物の型を変える設計変更のような展覧会を行いたいと考えました。会場内の二つの階段状の構築物から[p16-17]、公民館の外へ向けて二本の軸線を引いています。一方は乙羽岳、あるいはその先の安和海岸へと伸び、もう一方は新たに建設された大型テーマパーク「ジャングリア」が建つ嵐山へとつながります。

不安とユートピア

観光地としての沖縄では、キラキラした観光の現実と生活の現実という異質な二つの世界が同じ空間に併存しており、そのあいだで入り口と出口が反転していくような感覚に襲われることがあります。

私自身、建築現場で働きながら制作を続けるアーティストとして、作品がホテルに納品されたり、リゾート施設の建

設現場で作業員として働くことがあります。生活と制作と観光産業が密接に絡み合う日常は、沖縄で生きる多くの表現者にとって切実な現実の一つです。

1933年、小説家ジェームズ・ヒルトンは『失われた地平線』の中で、東洋のどこかにある不老不死の楽園「シャングリラ（Shangri-La）」を書きました⁷。この言葉はやがて「この世のユートピア」「手つかずの理想郷」を示す比喩として広く使われるようになります。

その楽園性を引用するように、2025年、今帰仁村に大型テーマパーク「ジャングリア」が開業します。事業者による記者会見では、「やんばる」の森で得られる“本当の体験”を提供するというコンセプトとともに、「不快な事が起こったらダメなんです」という発言がありました⁸。こうした不安や不快を丁寧に取り除こうとする姿勢は、テーマパークという形式を成立させるための重要な要素であるように感じられます。

受け入れられないものたちは、どこへ行くのでしょうか。

ここでの「やんばる」という価値づけの根源は、明治期に導入された国立公園制度に由来します。観光地の価値の源泉は「真正性（authenticity）」ですが、その真正性は国立公園制度や文化遺産制度によって担保されていると考えます⁹。観光文化が帯びるフィクション性は、じつはこうした真正性に由来する価値によって生み出されているのです。

これは、作家が作品を制作する過程とも似ています。作品はリサーチに伴う真正性とともに立ち上がります。しかし作品は、制度の内側になくとも、横断的な視座のもとでバラバラに現れることができると信じています。同じ土地に存在する開発も、アーティストの創作物も、「美」の名の下に何を選び取ったかという表明によって、それぞれのディテールが明らかになるのではないのでしょうか。価値が所与のものではなく人為的に構築されたものだとするなら、そこで私たちはどのような「意志」を持ち得るのかを考えたいと思います。

展覧会のはじまり

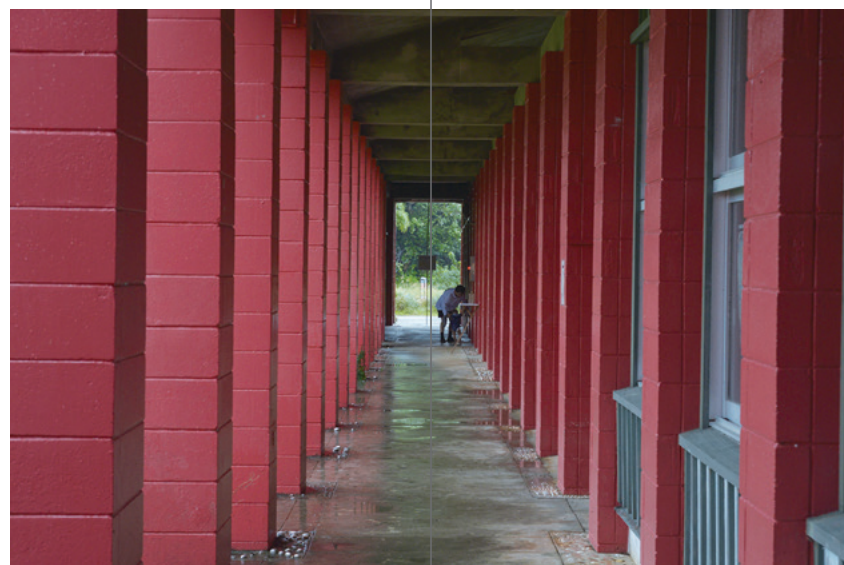
私たちは今、同じ土地に立ちながら、まったく異なる世界が重なり合う時代を生きています。理想郷は常に「ここではないどこか」に想定され、不安の排除を通じて形を得ます。しかし、本当の意味で不安を取り除くことはできず、得たい安全は想像された不安の上に築かれるのだと考えます。その多層は、私たちの身体が結びつく現実そのものです。

観光地が目指す「快適で整えられた場所」があるとすれば、本展はその対極にある「未完の風景」や「不安を孕んだ現実」と向き合うことを試みています。ただし、それは単なる対立ではありません。互いに一方では成立し得ない要素が、互いを補完しうる関係——すなわち、とりとめのない「状況」が像を結ぶための交点として、この展示を位置づけたいと考えています。

「パビリオン構想展」は完成されたモデルでも、明確な答えでもありません。変化し続ける環境の中で仮に設けられた、ひとつの仮設的な問いの場として構想されました。

この場所が持ちうるそれぞれのイメージへ接続する裏口として、この展覧会は始まりました。

- 1.「祝祭性」及び沖縄の観光地イメージについては以下の文献を参照。
多田治「沖縄イメージの誕生」東洋経済新報、2004年
- 2.『建築文化』1990年11月号、彰国社、77頁78頁
- 3.自治体（恩納村・今帰仁村・名護市）の基本構想への関与については以下の文献を参照。
菊池史彦「逆格差論、名護市長岸本建男と象設計集団が選したもの」論創社、2025年
- 4.『現代の建築家 象設計集団』SD編集部（編）、鹿島出版会、1987年、88頁
- 5.『建築文化』1990年11月号、彰国社、95頁
- 6.広島市ホームページ（最終閲覧日：2025年12月2日）
https://www.city.hiroshima.lg.jp/atomicbomb-peace/1036658/1021119/1031901/1020966.html?utm_source=chatgpt.com
- 7.ジェームズ・ヒルトン『失われた地平線』堀口大学訳、岩波書店、1952年（原著1933年）
- 8.沖縄タイムス公式動画チャンネル（最終閲覧日：2025年12月2日）
<https://m.youtube.com/watch?v=bN7ikw6f1Io>
- 9.文化遺産制度と「真正性」の概念については以下の論考を参照。
荒山正彦「文化のオーセンティシティと国立公園の成立」1995年
https://doi.org/10.4157/grj1984a.68.12_792





パピリオン構想展

2025年12月発行

会 期：2024年11月9日(土)～11日(月) 10時～18時
会 場：今帰仁村中央公民館
イベント：構想ラジオ / ゲスト：山口瞬太郎(建築家)
11月10日(日)14時～16時半

- アーティスト 松尾海彦
- 泉川のはな
- 遠藤薫
- 丹治りえ
- 宮城佳久
- 湯浅要
- 貝と言葉のミュージアム

装丁 米須清成[nagi press]

発行人 松尾海彦

印刷製本 株式会社イニユニック



